



「人」主語のドイツ語lassen使役構文の用法：トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて (その1)

湯浅，英男

(Citation)

国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 44:1*-27*

(Issue Date)

2015-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009188>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009188>



「人」主語のドイツ語 **lassen** 使役構文の用法

——トーマス・マンの『ファウスト博士』 の例文を用いて——

(その1)

湯 浅 英 男

(目次)

1. はじめに
 2. lassen 使役構文、lassen 受動構文、及び lassen 単独用法の出現分布
 3. lassen 使役構文の意味
 - 3.1. 主要な2系列の意味：「作為」と「容認」
 - 3.2. Shibatani (1976) の「使役的状況」について
 4. 不定詞が自動詞の場合の lassen 使役構文の分析
 - 4.1. lassen 使役構文の出現回数（不定詞が自動詞の場合）
 - 4.2. 各構文タイプの考察（不定詞が自動詞の場合）
 - 4.2.1. 「人」（主格主語）+ lassen + 「人」（対格目的語）+ 自動詞
 - 4.2.2. 「人」（主格主語）+ lassen + [「人」（対格目的語）の省略]+ 自動詞
 - 4.2.3. 「人」（主格主語）+ lassen + 「無生物」（対格目的語）+ 自動詞
- （以上、本号「その1」）
5. 不定詞が他動詞の場合の lassen 使役構文の分析（以下、次号「その2」）
 - 5.1. lassen 使役構文の出現回数（不定詞が他動詞の場合）
 - 5.2. 各構文タイプの考察（不定詞が他動詞の場合）
 - 5.2.1. 「人」（主格主語）+ lassen + 「人」（対格目的語）+ 「人・無生物」（対格目的語）+ 他動詞
 - 5.2.2. 「人」（主格主語）+ lassen + von+ 「人」（与格）/durch+ 「人」（対格）+ 「人・無生物」（対格目的語）+ 他動詞

- 5.2.3. 「人」(主格主語) + lassen + [「人」(対格目的語)の省略]+「人・無生物」(対格目的語) + 他動詞
- 5.2.4. 「人」(主格主語) + lassen + 「無生物」(対格目的語) + 「人・無生物」(対格目的語) + 他動詞
- 5.2.5. 「人」(主格主語) + lassen + von+「無生物」(与格) /durch+「無生物」(対格) + 「人・無生物」(対格目的語) + 他動詞
6. 不定詞が再帰動詞(対格再帰代名詞と共起)の場合のlassen使役構文の分析
 - 6.1. lassen使役構文の出現回数(不定詞が対格再帰代名詞共起の再帰動詞の場合)
 - 6.2. 各構文タイプの考察(不定詞が対格再帰代名詞共起の再帰動詞の場合)
 - 6.2.1. 「人」(主格主語) + lassen + 「人・無生物」(対格目的語) + 再帰動詞(「主格主語」を指示する対格再帰代名詞と共起)
 - 6.2.2. 「人」(主格主語) + lassen + 「人・無生物」(対格目的語) + 再帰動詞(「対格目的語」を指示する対格再帰代名詞と共起)
7. 不定詞が非人称述語の場合のlassen使役構文の分析
 - 7.1. lassen使役構文の出現回数(不定詞が非人称述語の場合)
 - 7.2. 各構文タイプの考察(不定詞が非人称述語の場合)
 - 7.2.1. 「人」(主格主語) + lassen + es(非人称) + 非人称述語(自動詞)
 - 7.2.2. 「人」(主格主語) + lassen + es(非人称) + 非人称述語(他動詞)
8. おわりに

1. はじめに

ポーランドに生まれ、1972年からオーストラリアで教鞭をとっていたA. Wierzbicka(1998; 邦訳版は2011)は、ドイツ語のlassenを用いた「迂言的使役構文(periphrastic causative construction)」(以下では「lassen使役構文」と呼ぶ)と英語の使役構文との意味的關係について、「さまざまな文脈において、この構文を最もうまく英語に訳するには動詞make, have, get, cause, letをもとにしたさまざまな構文を使い分ける必要がある」(Wierzbicka 1998: 118; 訳文は邦訳版

180頁使用)としている。その上で、ナチス戦犯として服役した A. Speer の手記 (*Spandauer Tagebücher*, 1975) から lassen 使役構文の文を取り出し、ドイツ語の使役構文を英語に対応させることの難しさを説明している。彼女の分析する4つのドイツ語文を英語訳と共に以下に挙げる (Wierzbicka 1998: 118f.; 邦訳版では180頁以下)。なお彼女は当該 lassen 使役構文の文末不定詞を「動作動詞 (action verb)」に限定している。以下 Wierzbicka (1998) については専ら邦訳版で出典を記載。また下記 (1b) 末尾の原文は got it であるが、邦訳版に合わせて got them に変更してある。

- (1) a. Ich habe mir Bleistift und neues Papier geben lassen.
b. I have asked for a pencil and new paper [and got them].
- (2) a. Vom Doktor eine Schlaftablette geben lassen. (日記中のメモ)
b. [to ask] the doctor for a sleeping tablet (and get one).
- (3) a. Im Anschluß an seinen Monolog drückte Hitler auf den Klingelknopf und ließ Borman kommen.
b. Having completed his monologue Hitler pressed the bell and [thus] summoned Borman.
- (4) a. Im Jahre 1938 hatte er [Streicher] ihm [Leibel] durch seinen persönlichen Adjutanten zum Geburtstag demonstrativ einen großen Distelstrauß überreichen lassen.
b. In 1938, he [Streicher, a Gauleiter of Nuremberg] had his personal assistant deliver to him [Leibel, mayor of Nuremberg] on his birthday, demonstratively, a large bunch of thistles.

ここでドイツ語と英語の使役構文の対応関係について Wierzbicka の主張したことを簡潔にまとめれば、「ドイツ語の lassen 使役は英語の対応する構文のどれとも意味的に等価ではない」(邦訳版180頁) ため、コンテキストによって ask for (頼む) や summon (召喚する) を使用する必要がある、また依頼・要求が成就したことを伝えるために got them や get one を補足する必要もあるといっ

た見解である。要するにここでは、上記のような「lassenを使った使役の使い道はとても広く、囚人から看守への頼みごと、地方長官から秘書への指示、そして独裁者から下の者への命令まで表すことができる」（邦訳版182頁）とする。

英語の種々の使役構文に対してドイツ語のlassen使役構文の意味論的語用論的幅の広さは、ポーランド語を母語とし、英語を日常的に用いているWierzbickaの着目するところであるが、別の視点から眺めれば、ドイツ語も含め「使役構文」一般についての典型的見方をWierzbickaの例示から読み取ることができる。つまり(1)～(4)の例においては、(文末不定詞を「動作動詞」としていることも関係するが)使役主も被使役主も共に「人」が想定されている。上記のWierzbickaの説明にある「頼みごと」「指示」「命令」は原文(1998:119)ではrequests, instructions, ordersであり、どれも「人」から「人」への発話行為(例えばrequest, instruct, order等)が前提とされていることが分かる。実際Wierzbickaは、上記のドイツ語lassen使役構文を正確に表現できる定式(formula)として、Person X ließ (let/made/had/asked etc.) person Y to do Z(原書版119頁)を提示しており(例文に対応させて過去形ließが使用される)、説明原理としての「人間の普遍的概念(universal human concepts)」(Wierzbicka 1998:118)の配置においても「人」から「人」への「使役」を基本としている。ただlassen使役構文一般を考えれば、こうした「人」から「人」へという発話行為論的解釈がどの程度有効かは検証の必要があり、こうした検証も本稿の主要な目的の一つになる(以下「本稿」と言う場合、次号の「その2」も含めて考える)。なおlassen使役構文には無生物主語の構文も当然あるが(あとの2.で例示のみ行なう)、本稿における分析対象構文の主語はあくまで「人」に限定し、その上で「人」を使役主とする使役構文の意味について考えてみたい。

またlassen使役構文のlassenは他動詞であり、基本的には被使役主として対格目的語をとる。しかし当該の被使役主については上記の例でも、(3)では対格目的語で出現するが(ただBormanの場合は状況からして直接的な被使役主とは言えないだろう)、(1)では言表には出現せず、(2)(4)ではvonやdurchを用いた前置詞句で出現している。本稿では、まず被使役主の統語論的出現方法や意味的性格を手掛かりにlassen使役構文を分類し、その中で、「人」を主

語とする) lassen使役構文の持つ意味や役割について検討してみたい。

分析の対象としては、トーマス・マン (Thomas Mann) の『ファウスト博士 (Doktor Faustus)』を用いることとする。本来文法研究で使用するコーパスについては「均衡性」などが問題となるが、他方で、「コーパス開発者は均衡性 (balance)・代表性 (representativeness)・比較可能性 (comparability) といった理念の実現を目指しているが、それらはいくらか達成できたとしても、完全に達成されることはほとんどない。実際のところ、均衡性や代表性は程度問題なのである」(McEnergy & Hardie 2012:10; 邦訳版2014の15頁) といった考え方もある。さらには Fillmore (1992) のように、「いかに大規模なものであっても、私が調べようとする英語の語彙的・文法的側面をすべて漏れなく含むコーパスはこの世には存在しないと思われる。[中略] 逆に、いかに小規模なものであっても、これまで調査に使用したコーパスはすべて、コーパスなしでは想像できなかった事実を私に教えてくれた」(McEnergy & Hardie 邦訳版40頁からの引用) と、文法研究における小規模コーパスデータの有用性を認める研究者もいる。本稿ではトーマス・マンの『ファウスト博士』という極めて限られたデータ (実際これは筆者がカードに書き取ったものにすぎないのだが) に基づく分析となるが、たとえ小規模であっても「コーパスなしでは想像できなかった事実」に触れる可能性はあろう。なお以下で「本コーパス」と言う場合は、分析対象としての『ファウスト博士』を指す (この場合の「コーパス」は電子化を前提としない広義の「言語資料」としておく)。

2. lassen使役構文、lassen受動構文、及びlassen単独用法の出現分布

lassenを用いた助動詞構文は、lassen使役構文のほかにも、「主語 + lassen+sich+不定詞」の形式をとる受動態代替構文 (以下では「lassen受動構文」と呼ぶ。通常、können+…+過去分詞 + werden等で書き換え可能とされる。Duden-Grammatik 2009:549等参照) を挙げることができ、lassen使役構文とは区別されるのが一般的である。例えば、「使役体系 (Kausativsystem)」と「受動体系 (Passivsystem)」を分ける Ide (1996) 等も参照。ここではlassen受動構文の例を参考までに本コーパスから三つ挙げておく (イタリック体の箇所を参

照。なお本稿の例文中のイタリック体は湯淺による)¹⁾。

- (5) a. Der Zeitpunkt *läßt sich nicht feststellen*, [...] (36) (いつとはっきり言うことはできないが) (上、44)
- b. Unglücklicherweise hat es *sich ermöglichen lassen*, [...] (233) (ところが不幸にして、それが可能となったのである) (中、7)
- c. denn über den Gemeinnutz *ließ sich streiten*, [...] (70) (公益というのが問題だったからである) (上、91)

上記の(5c)は自動詞のlassen受動構文の例であり、werden-受動態などと同様、lassen受動構文が自動詞でも形成可能であることが分かる。

そこで以下では本コーパスにおいて、lassen使役構文、lassen受動構文、lassen単独用法の内、どの用法がどの程度使用されているかといったlassenを巡る構文別使用状況の全体像をまずつかんでおきたい。ただlassenの単独用法の場合、実際には(対格目的語の他に)beiseite, allein等の副詞やfrei, zufrieden等の形容詞、さらにはaußer achtやin Frieden等の前置詞句と共に使用される場合も多く、それらの用法も便宜上lassenの単独用法に算入しておく。現在の正書法ではbeiseiteやzufrieden等は分離前綴り扱いされる傾向にあるが(例えばDuden-Rechtschreibung 2009参照)、トーマス・マン自身はlassenと切り離して単独の品詞扱いとしているため、それらと共に起するlassenも、lassenの単独用法とした。以下の表では、延べ数の形でlassen使役構文、lassen受動構文、lassenの単独用法の出現回数を示す。割合については、小数点以下四捨五入した数値(よって下記の表は全体が100%とならない)。以下においても同様。

(6)

	lassen 使役構文	lassen 受動構文	lassen 単独	全体
延べ回数	258 回	66 回	54 回	378 回
割合	68%	17%	14%	

上記の表は使役構文等の文末不定詞の重複を考慮せず、延べ出現回数で数え上

げたものである。実際8回を上限として複数回出現している(不定詞を同じくする) lassen 使役構文も存在する。例えば8回現われている不定詞は *gefallen* (気に入る)、5回は *gelten* (有効である)、 *merken* (気づく)、 *wissen* (知っている) 等である。なお不定詞 *sein* (～である)、 *werden* (～になる) については、共起する述語的な形容詞、過去分詞、名詞と合わせて一つのまとまりとし別述語としている。また下記の (7a) のように異なる二つの不定詞を持つ lassen 使役構文については、2度の使役構文の出現と見做している。同時に lassen 使役構文が *zu* 不定詞句となっている (7b) のようなケースも、出現回数に入れている (例文のイタリック体が該当箇所。 *zu* 不定詞句の解釈については後述参照)。

- (7) a. *Man muß ihn dozieren und korrigieren lassen.* (578) ([教師であるあの人の
については]講義をし、誤りを訂正させておけばいいのさ) (下、148)
- b. *daß mir der Gedanke, sie nächstens wieder ziehen zu lassen, sie vielleicht niemals
wiederzusehen, schwer erträglich ist.* (578) (近々彼女に旅立たれ、おそらく
二度と再び会えないと考えると、とてもやり切れない) (下、149)

表 (6) で lassen の使用状況を見る限り、本コーパスは一作家の一作品という極めて限定されたものながら、lassen 使役構文が極めて高い割合で使用されていることが分かる。従って、その文法的語用論の重要性は無視できない。

さらに lassen 使役構文の内、主格主語が「人」の場合と「無生物」(ここには「物」や「出来事」が入る) の場合のそれぞれの出現頻度が、本コーパスでどのようになるかを示してみたい。以下がそれぞれの場合の延べ出現回数と割合である。

(8)

	「人」主語	無生物主語	全体
延べ回数	189 回	69 回	258 回
割合	73%	27%	100%

本稿の分析対象である「人」主語の lassen 使役構文が全体の4分の3弱出現しているが、「物」とか「出来事」といった無生物主語をとる lassen 使役構文も

全体の4分の1を超える程度の出現回数があり、比較的多い。以下には無生物主語の lassen 使役構文の例を幾つか挙げておく(イタリック体が無生物主語の箇所)。

- (9) a. *die Tatsache, daß er sehr selten einen Gesprächspartner mit Namen anredete,*
läßt mich vermuten, daß er den Namen nicht wußte, [...] (13) (彼が話相手を
名前で呼ぶことがごくまれにしかなかったのは、相手の名前を知らなかつ
たからだ、と私は推測する) (上、15)
- b. *der literarische Gang meiner Mitteilungen* wollte mich bis zu diesem
Augenblick immer nicht dazu kommen lassen. (13) (私の報告の文学的進行
が、今のこの瞬間に至るまでその機会を与えてくれなかったのである)
(上、15)
- c. *Die Begierde, alles auf einmal zu sagen,* läßt meine Sätze überfluten, [...] (468)
(何もかもいちどきに言ってしまうおうという気持ちが、私の文章をあふ
れ出させて) (下、3)

上記の使役構文で主語となっている「無生物」は、*die Tatsache* (事実)、*der literarische Gang* (文学的進行)、*die Begierde* (欲望)であり、物理的な形状を持つ「物」ではなく、形にならない抽象的な概念であると言える。本稿では、無生物主語の lassen 使役構文について立ち入った議論は行わないが、今後改めてこの種の使役構文を分析する際には、無生物主語におけるこうした意味的特徴についても留意する必要があるだろう。

以下、上掲の (8) の表について多少補足しておきたい。まず (8) の「人」主語の lassen 使役構文の出現回数については、先の (7b) に見られるような lassen 使役構文自体が zu 不定詞句の形式となっているような例も含まれる。(7b) の zu 不定詞句の部分は、「私が…と考えること」と言い換えて考えれば、zu 不定詞句となっている使役構文の言表に現われていない主体は「私」つまりは「人」主語と想定してよい。次に挙げる (10a) のような例も同様で、これも「私が…と願い、努力すること」と言い換えれば、zu 不定詞句の主体として「私」が想定できる(イタリック体参照)。また表 (8) の「人」主語の出現回数には

Gott (神) が主語となっている例も二つ含まれている (全集版137頁、140頁)。
 例えば (10b) のような例 (イタリック体が主語)。よって厳密に言えば、表 (8) の189回という数は、「人」主語の場合と「神」が主語の場合を合わせた出現回数と言える。

- (10) a. Und was im besonderen die Musik betrifft, so ist es *mein Wunsch und Bestreben, den Leser auf ganz dieselbe Art ihrer ansichtig werden zu lassen*; [...] (97) (そして特に音楽に関して私が願い努めるのは、読者にも[私の亡き友と]まったく同じやりかたで音楽をさせたい[...]ということである) (上、126)
- b. Sie hatte aber Stern gehabt, denn noch gerade vor Ablauf der Frist ließ *Gott* in seiner Liebe sie in die Hände der Inquisition fallen, [...] (137) (しかし彼女は運がよかった。というのは、ちょうど期限が切れる前に、慈悲ぶかい神が彼女を宗教裁判の手に渡したからである) (上、180)

3. lassen使役構文の意味

3.1. 主要な2系列の意味：「作為」と「容認」

lassen使役構文の意味については、文法書及び辞書の記述を見ても、概ね2系列の意味が記載されている。詳細な統語的分類に基づく実証的研究を行なう Nedjalkov (1976) は、その意味を「作為性 (Faktivität)」と「容認性 (Permissivität)」に分け、前者に対しては「強要 (Zwang)」「誘発 (Veranlassung)」「招来 (Hervorrufung)」等、後者に対しては「認可 (Genehmigung)」「許可 (Erlaubnis)」「無抵抗 (Nichtwidersetzung)」等の下位的概念でさらに具体化している (Ide 1996:27, Ide 1998:274も参照)。また Zifonun u.a. (1997:706) では、lassen使役構文の持つ「使役的 (kausativierend)」乃至は「許可的 (permittierend)」要素をそれぞれ *veranlassen* (誘発する) と *erlauben* (許可する) を使って書き変え可能であるとし、Peter läßt Hermann Paul besuchen. (ペーターはヘルマンにパウルを訪問させる；高名な文法学者 Hermann Paul の氏名を Hermann と Paul という二人の名前に使った言葉遊び的例文) という文について、Peter veranlaßt

Hermann, Paul zu besuchen. (ペーターはヘルマンにパウルを訪問するように言う) と Peter erlaubt Hermann, Paul zu besuchen. (ペーターはヘルマンに対しパウルを訪問することを許す) といった2種の書き換え可能性を指摘している。同様に Eisenberg (1999:359) も、lassen 使役構文の意味を「指示的 (direktiv) 意味」と「許可的 (permissiv) 意味」に分け、Karl läßt mich arbeiten. (カールは私を働かせる) の例文に対し、Karl veranlaßt mich zu arbeiten. (カールは私に働くように言う) と Karl läßt mich beim Arbeiten in Ruhe. (カールは私が仕事をするのを邪魔しない) のように二様に書き変える。文法書に加え辞書においても、こうした「作為」と「容認」といった2種のタイプの意味が採用されている。一例を挙げれば、Duden-Deutsches Universalwörterbuch (1983) では、lassen 使役構文の意味は、「veranlassen (促してさせる), bewirken (daß etw. geschieht) (何かが生起するように計らう): einen neuen Anzug machen, das Auto waschen l. (新しいスーツを作らせる、車を洗わせる)」といった「作為」の意味と、「zulassen (許す), erlauben (許可する); dulden (黙認する), nicht an etw. hindern (ある事を邪魔しない): jmdn. verhungern l. (誰かを餓死するまにしておく)」といった「容認」の意味の二様に解釈される。

上記の意味記述においては、同一の lassen 使役構文が「作為」と「容認」といった大きく2系列の意味に解釈されているが、他方井出 (2013) では lassen 使役構文に対し、「要求 (Aufforderung)」、「許可 (Zulassen)」、「放置 (Lassen)」、「惹起 (Zustandebringen)」の4つの意味を提示し、それぞれの選択基準を示す。そこでは lassen の対格目的語が「意思を持って主体的に行動できる」(井出 2013:102) かどうか (つまり [+意思] か [-意思])、不定詞が「継続的」か「瞬間的」(つまりは「非継続的」) かどうか (つまり [+継続] か [-継続]) といった当該要素に関わるある特定の意味特徴の有無が、lassen 使役構文の意味決定要因となっている。さらに主語 (S)、目的語 (O) 共に「意思的」であって、「 S^{+caus} 」の意思が強く O^{+caus} がその意思に従うような場合、必ずしも O^{+caus} の側からのイニシアティヴでの行動ではないような場合 ($S^{+caus} > O^{+caus}$)、『要求』という意味解釈になる」(井出 同:102) ²⁾。「逆に O^{+caus} の意思が強く、それに S^{+caus} が反対しない、それを妨げないような場合 ($S^{+caus} < O^{+caus}$) には『許可』の意味解釈と

なる」(井出 同:103)。他方で目的語が意思的でない場合、不定詞が「継続的」な意味を持てば「放置」の意味解釈、不定詞が「継続的」な意味を持つのではないならば(つまりは「瞬間的」な意味を持てば)「惹起」の意味解釈となる。井出(同:105)の「lassenの意味解釈チャート」も参照のこと。ただ見方を変えれば、 $S^{+caus} > O^{+caus}$ と $S^{+caus} < O^{+caus}$ は各々「要求」と「許可」の単なる語義上の言い換えとも解釈できる。また「要求」や「許可」が基本的に「人」から「人」への発話行為に関わる概念である以上、lassenの目的語が意思を持たない「物」や「出来事」の場合には、井出の言う「放置」や「惹起」といった非対人的な概念を想定せざるを得ない。なお「放置」の意味の場合には不定詞は「継続的」な出来事であり、「惹起」の意味の場合には不定詞は「瞬間的」な出来事であるといった関係性については、あとの具体的分析の中で検討してみたい。

3.2. Shibatani (1976) の「使役的状況」について

ここでlassen使役構文の意味解釈についてはひとまず置き(後に具体例に即して検討する)、「使役構文 (causative construction)」とは一般にどのようなのかをShibatani (1976) に即して確認しておきたい。Shibatani は使役構文の表現する状況、つまり「使役的状況 (causative situation)」(Shibatani 1976:1) が二つの出来事(event)によって構成されており、それが成り立つためには以下の条件が必要であると述べている。

- (11) a. 二つの出来事の関係は話し手が、一つの出来事つまり「引き起こされる出来事 (caused event)」の発生が t_2 の時点—その時点は「引き起こす出来事 (causing event)」である t_1 の時点以後に位置している—において実現されたと信じているといった関係である。
- b. 引き起こす出来事と引き起こされる出来事の関係は、引き起こされる出来事の発生が完全に引き起こす出来事の発生に依存しているといった関係である。ここでの二つの出来事の依存性(dependency)は、すべての他の条件が同じであり続けるとするなら、引き起こす出来事が仮に生起していなかったとすれば、引き起こされる出来事も生起しなかつ

たであろうという反事実的推論を話し手に抱かせるような関係である。

(a, b は Shibatani 同:1f.)

上記は「使役的状况」を成り立たせる二つの出来事の条件で、基本的には二つの出来事の「時間関係」と「因果関係」に関わるものである。これらの条件は、ドイツ語の lassen 使役構文を考える上でも当然考慮すべき事柄であろう。ただ本稿では lassen 使役構文の統語的意味的構造から「二つの出来事の依存関係」の具体的内実（例えば、「人」から「人」への発話行為なのか、あるいは「人」から人以外の物や出来事への何らかの働きかけなのか等）について詳しく見ていきたい（本稿では立ち入って議論しないが、(9) の例でも見たように無生物主語が「使役」の原因となっている場合もある）。またドイツ語の lassen 使役構文について言えば、すべての用例が Shibatani (1976) の「使役的状况」に適用のものとは限らない。例えば lassen の目的語が意思を持たない、井出 (2013) が「放置」として分類した使役構文では、不定詞で表わされる出来事は「引き起こす出来事」の発生以前から生起している。井出 (2013:104) の挙げる例をやや簡略化した (12) を参照。

(12) Ich lasse die Dusche weiterrieseln. (私はシャワーを流れるままにしておく)

この (12) の使役構文は、不定詞 weiterrieseln (引き続き流れ続ける) が「継続」という意味特徴を持ち（井出の）「放置」の解釈に該当するが、不定詞で表わされている状況（上記 Shibatani の「引き起こされる出来事」に対応）の方が lassen で意味される使役行為（実際には「何もしないでおく」という不作為）よりも時間的には先行している。こうした事実を考えれば、使役構文を成立させる Shibatani (1976) の意味論的枠組みも大枠としては妥当性を持つとしても、必ずしもすべての使役構文の用法に当てはまるとは限らない。

以上を簡潔にまとめてみると、まず lassen 使役構文には従来、Nedjalkov (1976) の用語を使えば「作為性」と「容認性」という二系列の意味解釈がなされている。しかし井出 (2013) に従えば、lassen の目的語に関する「意思」の有無や

強弱といった意味論的性格がlassen使役構文の意味解釈に関与的になりうる場合もある。ただ井出（2013）の説については、なお検討の余地がある。またドイツ語のlassen使役構文においては、(11)で紹介したようなShibatani（1976）の使役構文の一般的枠組みが必ずしも妥当性を持つとは言えないケースもある。

4. 不定詞が自動詞の場合のlassen使役構文の分析

4.1. lassen使役構文の出現回数（不定詞が自動詞の場合）

すでに述べたように本稿では（無生物主語を除く）「人」主語のlassen使役構文の分析を行なう。まず不定詞が自動詞の場合を分析するが、ここでの自動詞・他動詞の区別は単純に対格目的語を取るかどうかを基準とする。また自動詞の場合、（対格目的語は取らないとしても）与格目的語や前置詞句を結合価的にとる場合もあるが、構文表示の簡潔化を図るためそれらの表示はあえて行っていない。最初に、本コーパスにおいて自動詞が不定詞となる場合の、各構文タイプの延べ出現回数を示す（つまり不定詞となる動詞の重複をいとわず数え上げる）。すでに上掲の（8）で見たように、「人」主語のlassen使役構文の出現総数は189回である。従って不定詞が自動詞となる計105回（下表（13）参照）は「人」主語のlassen使役構文全体の約56%となり、かなり多い。なお表中を含め単に「目的語」と言う場合は、lassenの「対格目的語」を意味する。

(13) 不定詞が自動詞の場合

「人」目的語	「人」目的語の省略	無生物目的語	無生物目的語の省略
28 (27%)	3 (3%)	74 (70%)	0 (0%)
(小計) 31 (30%)		(小計) 74 (70%)	
(総計)	105 (100%)		

延べ出現回数に関し一言断っておけば、上掲（8）の表に関して述べたlassenの主格主語が（「人」でなく）Gottの2例は、上表においてそれぞれ1例ずつ「人」目的語と無生物目的語の数に算入されている。同時に「人」目的語の28例には、lassenの対格目的語がGott（全集版375頁）、Geist（精神）（同、554頁）、Orchester（オーケストラの団員たち）（同、593頁）等の文も含められている。

また無生物目的語は、「物」とか「出来事」を表わす名詞・代名詞がlassenの目的語となっていることを意味するが、「人」主語のlassen使役構文に限っても、不定詞が自動詞の場合、約7割がlassenの目的語として「無生物」名詞句を取っている（出現回数で言えば74回）。これは「人」をlassenの目的語として取っている場合（28回、27%）の2倍以上の数に上る。またlassenの対格目的語は不定詞である自動詞の「意味論的主語」となるが（「lassenの対格目的語＋不定詞」を仮に主文に埋め込まれた「補文（Komplementsatz）」とするならば³⁾、lassenの対格目的語は「補文」の「意味論的主語」と言ってよいだろう）、不定詞が自動詞の場合、この意味論的主語（つまりlassenの対格目的語）が省略されるケースは極めて少ない。「無生物」名詞句が省略されていると思われるケースは存在せず、「人」が省略されていると思われるケースが3例あるのみである。この3例については、下記の当該構文の項目（4.2.2.参照）で紹介する。

4.2. 各構文タイプの考察（不定詞が自動詞の場合）

4.2.1. 「人」（主格主語）＋lassen＋「人」（対格目的語）＋自動詞

不定詞が自動詞の場合の、本コーパスにおける「人」目的語構文の出現回数（28回）は、「無生物」目的語構文の2分の1以下であるが、必ずしも少ないとは言えないだろう。前節（13）の表を参照のこと。この使役構文においては、典型的には「人」の「行為」が不定詞として使用されている。例えば以下のような例である。例文ではlassenと不定詞をイタリック体とした。

- (14) a. Nun aber möge man es mir *verzeihen*, wenn ich ihn noch einmal *auftreten* *lasse*. (86)（ところで、もう一度彼に登場してもらうことを許していただきたい）（上、112）
- b. Er behielt viel für sich und *ließ* nur mich allenfalls, in gelockerten Augenblicken, *teilnehmen* an seinen Spekulationen, [...] (101)（彼には、自分だけのものにしてあるものがたくさんあった。そして気を抜いた折々に、必要とあれば私にだけは思索の結果を漏らしてくれた）（上、131）

- c. Wenn du dich nun zu ihr aufmachst, *laß* sie auch darin [=im Buche meines Herzens] *lesen*, erzähle ihr von mir, sprich gut von mir, [...] (582) (それで君が彼女のところへ行ったら、彼女にもぼくの心の書を読ませ、彼女にぼくの話をし、ぼくのことをよく言って) (下、154)

ここで少し *lassen* 使役構文の意味を検討してみよう。本稿の1.の「はじめに」で紹介したように、Wierzbicka (1998) はドイツ語の *lassen* 使役構文は英語の *make*, *have* 等を使った多様な使役構文のどれとも対応せず、意味的にはかなり広い領域をカバーすることを指摘している。Wierzbicka (1998:118f.) の解釈に従えば、ドイツ語の *lassen* 使役構文は英語では *ask for*, *request*, *summon* 等の「発話行為動詞 (speech act verbs)」(同: 118) を使って訳されると共に、過去時制を使った場合は単に依頼したり、要請したりしたというだけではなく、その行為の成就も含意されている。また上例 (14) の構文は使役主、被使役主共に「人」で、意思を持つため、井出 (2013) の $S^{+caus} > O^{+caus}$ (この場合、「要求」) か $S^{+caus} < O^{+caus}$ (この場合、「許可」) を援用すれば、(14a) (14c) の例では主語 (それぞれ「私」と「君」) の (不定詞で表わされる) 行為への強制意思が強いため「要求」、(14b) はどちらかと言えば目的語である「私」の、彼の思索への関心が高く、それを知りたいといった意思が強いため「許可」と推論できる。ただ言うまでもなく「使役主」、「被使役主」の「意思の強さ」は個々の発話状況や前後関係に左右される相対的かつ語用論的性格を持つと言え、また使役主・被使役主間の社会的権力関係や各々の権限の有無等もその都度の $S^{+caus} > O^{+caus}$ か $S^{+caus} < O^{+caus}$ かの決定にはかなりの影響を与えることになる。むしろ意味解釈的に大きく捉えるならば、その都度の語用論的状况によって Wierzbicka の言うような「依頼」「要請」「命令」等々の幅広い発話行為を *lassen* 使役構文がカバーしていると見ておくのが適当であろう。なお (14) の各例については、Wierzbicka の指摘するような何らかの発話行為の実行が推測されるが、次の (15) のように発話行為が想定されない場合もある。

- (15) Er hatte Ungereimtes gestammelt zunächst und war dann in klagendes Schelten

ausgebrochen über die saubere Wirtschaft bei ihm, daß alles davongelaufen, daß man ihn *hungern lasse*. (81) (彼ははじめ何やらわけのわからないことをつぶやいていたが、やがて、自分のところで一騒動もあがってみんな逃げてしまい、腹がへってたまらぬ、とこぼして、罵りちらした) (上、105f.)

上記の *lassen* 使役構文の意味は、「誰も食事の用意をしてくれないため、自分は飢えた状態になっている」といったことであろう。*lassen* の目的語 *ihn* (彼) は「人」で自動詞 *hungern* (飢えている) が使われていることから、本節で扱う構文タイプに入れて問題はないと思われる。しかし Wierzbicka の見解に沿って、誰かが彼に飢えることを依頼・要請・命令したりするといった解釈は、一般常識的には考えにくい。最も妥当な解釈に思われるのは、井出 (2013:105) の「意味解釈チャート」における「放置」という意味であろう。ただ仮に不定詞 *hungern* が [+継続] という井出の意味条件に適用としても⁴⁾、もう一つの条件である目的語 (ここでは *ihn*) が [-意思] であるとは認めにくい。ただ不定詞が「行為」ではなく「状態」を意味する場合、*lassen* の目的語 (不定詞の意味論的主語) は意思的に行動している存在ではありえないため (あとの 4.2.3. で触れるが、この構文タイプには不定詞が *sein* の場合もある)、実際には「人」であっても「物」扱いだせる可能性もある。⁵⁾ いずれにせよ Wierzbicka (1998) が *lassen* 使役構文の中に見る発話行為的解釈は、たとえ *lassen* の目的語が「人」であっても、当該の構文タイプすべてに当てはまるわけではない。

4.2.2. 「人」(主格主語) + *lassen* + 「人」(対格目的語) の省略 + 自動詞

このタイプの使役構文においては、*lassen* の「人」対格目的語 (不定詞の意味論的主語) が省略されているが、不定詞となる自動詞は下記の (16) の例に見るように、やはり「人」の行為・態度等を表わしていると言える (後述参照)。ただこの構文は (13) の表 (4.1. 参照) でも分かるように本コーパスにおいても3例しかなく、極めて少ない。実際井出 (2013:106) では、「不定詞が自動詞の場合には、*Er ließ stehen* とはできないように、 O^{+caus} を省略することは文法的に不可能である」としている。ただ不定詞の表わす意味内容によっては、対格

目的語が省略される可能性は依然残っている。また(13)の表に見るように、lassenの目的語として「無生物」が推測されるような目的語省略例は皆無なため、少数ながら「人」目的語の省略例があることは注目すべきかもしれない。また藤縄(2002:63)も Mannheimer Korpus Iを用いた調査で(ただ藤縄の調査は「人」主語使役構文に限っているわけではなく、lassenの目的語も「人」「無生物」に拘わらない)、不定詞である「自動詞の論理的主語」が対格で表示されるケースが1,261例(自動詞の事例の93%)に対し、無表示の事例が94例あることを示している。この調査結果は「人」目的語が無表示となる事例の存在を十分予測させる。因みに本コーパスに関わる上掲(13)の表(「人」主語のlassen使役構文に限られる)において目的語の有無のみに焦点を当てると、総数105例の内、3例のみが省略、102例が出現となり、lassenの対格目的語の出現率は97%で、どちらかと言えば「目的語の省略は不可能」という井出の見解に近い結果となっている。以下では、本コーパスにおける「人」目的語の省略例3例の内、まず2例を見てみる。

- (16) a. Du versuchst, mich auszufragen, um dir bange *machen* zu *lassen*, bange vor der Hölle. (328) (君がほくに問いただそうとするのは、自分を不安にするため、地獄に対して不安な気持ちにするためなのだ)(中、141)
- b. So komme er in Gesellschaft immer als letzter, aus dem Bedürfnis, auf sich *warten* zu *lassen*, immer die anderen auf sich. (391) (たとえば彼は、自分を待たせたい、つまり常に他人に自分を待たせたい、という欲求から夜会には一番最後に現われる)(中、224)

上記2例のlassen使役構文(共にzu不定詞句内)は「人」主語構文と想定することが可能であり、同時に不定詞machen, wartenそれぞれの意味論上の主語(lassenの目的語)となるべき「人」名詞句が省略されていると考えられる。ただこれら2例の場合、不定詞として典型的な自動詞が使用されていないことに注意すべきであろう。(16a)のbange machen(不安がらせる)はdirという与格目的語を補足成分として取っている上、dirは対格目的語dichと交代しても

（「まれ」ではあるが）容認可能である（Duden-Deutsches Universalwörterbuch, 1983参照）。つまり *bange machen* は（自動詞というよりも）他動詞に統語的振舞いが比較的近い。仮にそうであれば *lassen* の「人」目的語の省略も十分ありうることと言える（不定詞が他動詞で *lassen* の「人」目的語が省略される構文については次号「その2」の5.2.3.参照）。また（16b）の *warten* も「auf+対格名詞句」という前置詞目的語を取っており、行為の「対象」を統語的に必須としているという意味では他動詞に近い。さらに当該の *zu* 不定詞句の直後には *die anderen*（他人）という *lassen* の目的語を追加的に提示している。上記（16）には挙げなかった三つ目の *lassen* の目的語の省略例については同じく *zu* 不定詞句内で、*das, was von Rudolf >ausging<, die unleugbare erotische Anziehungskraft des Menschen, für sich wirken und werben zu lassen*（586）（ルードルフから《出てくる》もの、すなわち、この男の否定し難い挑発的な魅力を、自分のために利用して結婚申込をさせようという）（下、160f.）となっており（*werben* の意味論的主語に該当する「人」の対格名詞句が省略されている）、対格名詞句の持つ文法的意味論的役割より、*wirken und werben* という対句的文体的効果を重視した省略の例と考えられる。このようなある一定の理由を持つ省略例を除けば、一般には不定詞が自動詞で *lassen* の対格目的語（「人」「無生物」共に）が省略されるケースは、極めてまれと言ってよい。

4.2.3. 「人」（主格主語）+ *lassen* + 「無生物」（対格目的語）+ 自動詞

不定詞が自動詞の場合の表（13）を見ても分かるように、*lassen* の目的語（不定詞の意味論的主語）が「無生物」名詞句（つまり「物」とか「出来事」）となる場合（74回）は、「人」目的語の場合（28回）の2倍以上に上る。またこの74回という出現回数は、「人」主語の *lassen* 使役構文（総数で189回）の内、4割近くが「無生物」目的語を持ち不定詞が自動詞となる当該構文であることを意味しており、この構文は本稿分析構文中、延べ数での出現頻度が最も高いことになる。この構文タイプについて井出（2013）は、*lassen* の目的語が[－意思]で不定詞（この場合は自動詞）が[＋継続]の場合、*lassen* 使役構文は「放置」、不定詞が[－継続]（つまり「瞬間的」）である場合に「惹起」という意味解釈

を提示している。そこでこの井出の意味解釈を検証してみたい。まず井出が「放置」の意味とした継続的な自動詞（不定詞）の例を挙げる。

- (17) a. Er *ließ* die Bälge *ruhen*, nahm die Hände vom Manuale und errötete lachend.
 (65) (彼はペダルを踏むのをやめて鍵盤から手をはなし、笑いながら顔をあからめた) (上、84)
- b. Alles brach in Lachen aus; auch Adrian tat es, indem er die geschlossenen Hände auf der Klaviatur *liegen ließ* und den Kopf darüber beugte. (153) (みんなは一斉に爆笑した。アドリアンも両手を組んでピアノの上におき、その上に頭をうつ伏せて、同じように笑った) (上、199)
- c. Das gehe ineinander über und durchdringe einander, sagte ich, und er *ließ* es *gelten*, zeigte aber wenig Neigung, das Fertiggestellte zu erörtern, [...] (349)
 (これはお互いにまじり合い滲透し合っている、と私が言うと、彼はそれを承認したが、できあがったこの作品を論ずることにはあまり気乗りを見せず) (中、169)

上記で用いられた自動詞は、*ruhen*（休んでいる）、*liegen*（横たわっている）、*gelten*（有効である）とどれも[+継続]の意味を持つと言ってよい。しかしどの例も「放置」の意味とは解釈しにくい。例えば(17a)は、彼がオルガンのふいごを踏んで演奏していたのを途中でやめ、「ふいごを休止させている状態」を彼が引き起こしたと解釈できる。つまり、以前から続いていたふいごの休止状態を「放置」したわけではない。(17b)も同様に、アドリアンは直前までピアノ演奏をしていた手を休め、鍵盤の上に置いた、つまり「手が鍵盤の上に置かれている状態」を自ら生起させたと解釈できる。よってこれも以前から手を鍵盤の上においていた状態を「放置」したとは言えない。(17c)の*gelten*は抽象的観念の意味であるが、私の発言内容について、*Es gilt*. (了解した)という判断を彼が行なったということを意味している。この判断は、私の発言を聞いて初めてできることであり、以前の了解状態をそのまま「放置」ということとは異なる。上述のShibatani (1976)の用いた「出来事(event)」という概

念ではなく、「状態」をも含んだ「事態 (Sachverhalt)」といった概念を使うならば、(17) の各例の *lassen* 使役構文は不定詞の意味が[+継続]の事態であっても、「(ある事態を) 引き起こす」という積極的行為の意味で使われている。上述の(12)で説明した、「(シャワーから水が流れるのを) 放置する」といった解釈とは異なる用例と見てよい。本コーパスには[+継続]の意味特性を持つ典型的な動詞 *sein* (～である) が不定詞に使われている使役構文の例もかなりあるため、それらの例についてもここで検討してみよう。

- (18) a. Daß ich es mir angelegen *sein* ließ, ihnen wohlzuwollen ([...]) , darf ich mir zur Ehre rechnen; [...] (418) (私が彼女たちにつとめて好意を寄せようとしたこと ([中略]、これは私の名誉としてもよい) (中、261)
- b. Laß das gut *sein*. (298) (まあそんなことはどうだっていいじゃないか) (中、97)
- c. Die Auswahl des Schlafzimmers droben *lasse* er ihre Sache *sein* und freue sich auf die Abtsstube. (338f.) ([アドリアンは答えた、]二階の寝室のどれを選ぶかはそちらにおまかせする、修道院長室は楽しみにしている [と]) (中、155)

上記の内、(18a) の *angelegen sein lassen* は与格の再帰代名詞も共起させ、「～するように心がける」を意味する慣用表現で、これを含め計4例ある。ここでの例も、当時彼女たちに好意を寄せようと心がけたという一つの積極的態度を示しており、「放置」とは言えない。また(18c)の例においては、自分がその時の判断として寝室の選択をそちら側の所掌事項とした、という当時の決断が間接話法で表現されており、決定済みのことを「放置」したということではない。ただ(18b)については、相手が親しい友人に対しても親称の2人称 *du* (君) を使ったり、ファーストネームで呼んだりしないことを話題にした直後の発言で、「そうした呼び方については、そのままの状態でよしとしよう」といった「放置」と解釈できる内容である。以上を井出(2013)に即してまとめれば、この構文タイプの *lassen* 使役構文を「放置」と解釈できる場合、自動詞(不定詞)は必

ず[+継続]を持つが、[+継続]の自動詞が用いられたからといって必ずしも「放置」の意味であるとは限らない。むしろ lassen が、「(ある事態を) 引き起こす」といった (Nedjalkov 1976 の用語を使えば) 「作為性 (Faktivität)」の意味を持つ場合も多い。ただ以下の点は注意しておきたい。Wierzbicka (1998) は使役動詞 lassen の含意に関して、主語の「人」から目的語の「人」への多様な発話行為に着目していたが、ここで扱う構文タイプは対格目的語が「物」や「出来事」といった無生物であるため、対格目的語に対する直接的な発話行為は実質的に想定しにくい。lassen 使役構文の含意する意味内容については、むしろ「ある事態を引き起こす」要因としての「人」主語の種々の行為、決意、判断等が想定される。

次に、自動詞 (不定詞) が[-継続]つまり瞬間的意味を持つ場合、当該使役構文を「惹起」の意味と解釈した井出 (2013) についても検討してみたい。以下が瞬間的意味の自動詞の例である。

- (19) a. Ich mußte es mir *gefallen lassen*, daß auch Adrian sie[=die Theologie] als ein solches hinnahm, [...] (124) (アドリアンも神学をそういうものと考えているのを、私は是認せざるを得なかった) (上、162)
- b. wo immer man gewagt hatte, von Adrians Musik etwas *erklingen zu lassen*: [...] (520) (人がアドリアンの音楽の何かを響かせることに踏み切ったところなら) (下、70)
- c. Wir brauchten ihr den Revolver nicht zu >entwinden<; sie hatte ihn *fallen lassen* oder vielmehr von sich geworfen, und zwar in der Richtung ihres Opfers. (596) (われわれは彼女から連発ピストルを《もぎとる》必要はなかった。彼女はそれを落とした。あるいはむしろ、自分から投げ出した、しかも彼女の犠牲者の方に向かって) (下、174)

上記の (19a) の *gefallen lassen* は与格の再帰代名詞を取り、「(lassen の対格目的語となる) ある事を甘受する」を意味する。この慣用的表現は瞬間的精神活動を表わすと見做せるが、他の (19b) (19c) は「(何かを) 響かせ始める」「(ピ

ストルを) 落とす」といった物理的な行為であり、そうした事態を引き起こす何かを「人」が行なったということになる(例えば、「演奏する」「手の握りを緩める」等)。よってこれらの用法は、先の(17)(18)の[+継続]の自動詞の場合にも多く見られた「作為性」(Nedjalkov 1976)の用法と言える。(19a)の場合は他の2例と異なり精神的意味となるが、これも含め(19)の3例は総じて井出(2013)の「惹起(Zustandebringen)」という意味解釈があてはまるであろう。

以上の考察をまとめれば、lassenの対格目的語に「無生物」名詞句が来て、不定詞が自動詞となる構文タイプにおいては、「継続的」か「瞬間的」かという自動詞のアスペクト的意味がlassen使役構文の意味に直接的に関与することは少なく(「放置」の意味と解釈される場合は[+継続]の自動詞が使用されるといった命題は成り立つが、逆は必ずしも真とはならない)、むしろlassen自体の「作為性」の意味が構文に反映されることが多い。

(つづく)

(注)

- 1) 例文末尾の数字は、『ファウスト博士』収録の、トーマス・マンの『全12巻本全集(Gesammelte Werke in zwölf Bänden)』第6巻の頁数。また例文のあとには、関泰佑・関楠生訳(岩波文庫版)の該当訳を参考までに挙げ(なお訳文中の[]は適宜湯淺が補足した箇所)、「上」「中」「下」各分冊の別と頁数を付した。例文の文頭が小文字の場合は、独立した「文」の始まりではないことを示す。以下、例文については同様。
- 2) SやOの右肩の+causは、当該文成分(つまりSあるいはO)が使役構文へ変換したあとの統語的立場であることを示し、使役構文への変換前の統語的立場を示す-causと対比的に扱われる。つまりS^{+caus}はlassen使役構文の主格主語、O^{+caus}は使役動詞lassenの対格目的語と考えればよい。
- 3) Bußmann(1990)の『言語学辞典』では、「補文(Komplementsatz)」は、dass-文やzu不定詞などの形式を取り、動詞の目的語となる「目的語文(Objektsatz)」と同義と見做される。しかし本稿では、この用語をlassen使役構文に埋め込まれた「(不定詞の)意味論的主語+不定詞(述語)」という構造に対し説明上用いることとする。ただ当該使役構文では、不定詞の「意味論的主語」は通常対格名詞句(lassenの目的語)の形を取るほか、vonやdurchによる前置詞句で表現されたり、省略(つまりは「ゼロ」)される可能性もある。
- 4) hungernの意味は、例えばWahrig Deutsches Wörterbuch(1997)によれば、「(一時的に) Hunger haben(空腹である)；(常に) nicht genügend zu essen haben(十分な食べ物を持ち合わせていない), Hunger leiden(空腹に苦しんでいる)」であり、「継続的」な意味を持つと言てよい。
- 5) 状況によっては「人」を「物」扱いできるとする場合、「放置」という意味解釈の条件である目的語の意味論的性格[-意思]は、目的語自体に内包される自立的意味では決定できないこととなる。仮に井出(2013)の論に従うとすれば、結局不定詞となる動詞の意味論的性格

のみがlassenの目的語の「意思」の有無や「放置」・「惹起」という使役構文の解釈を決めてしまうことになる。

(参考文献)

以下では、本号の「その1」、次号の「その2」の参考文献を合わせて掲載している。

- Bußmann, H. (1990) : *Lexikon der Sprachwissenschaft*. 2. Aufl. Stuttgart: Kröner.
- Drosdowski, G. (Hrsg.) (1983) : *DUDEN Deutsches Universalwörterbuch*. Mannheim: Bibliographisches Institut.
- Dudenredaktion (Hrsg.) (2009) : *Die deutsche Rechtschreibung*. (Duden Band 1) 25. Aufl. Mannheim: Dudenverlag.
- Dudenredaktion (Hrsg.) (2009) : *Die Grammatik*. (Duden Band 4) 8. Aufl. Mannheim: Dudenverlag.
- Eisenberg, P. (1999) : *Grundriß der deutschen Grammatik. Band 2: Der Satz*, Stuttgart: Verlag J. B. Metzler.
- Fillmore, Ch. (1992): "Corpus linguistics" or "Computer-aided armchair linguistics". In: Svartvik, J. (ed.): *Directions in Corpus Linguistics: Proceedings of the Nobel Symposium 82, Stockholm, 4-8 August 1991*, pp. 35-60. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 藤縄康弘 (2002) : 「コーパスによる不定詞付き対格構文分析—lassenの下における事例を対象に—」、井口靖 (編) 『コーパスによる構文分析の可能性 (日本独文学会研究叢書 009)』 60-75頁 所収.
- (2013a) : 「第5章 受動態と使役」、『講座ドイツ言語学 第1巻 ドイツ語の文法論』 ひつじ書房、97-119頁 所収.
- (2013b) : 「第7章 自由な与格」、『講座ドイツ言語学 第1巻 ドイツ語の文法論』 ひつじ書房、145-166頁 所収.
- Helbig, G. (1981) : Die freien Dative im Deutschen. In: *Deutsch als Fremdsprache* 6, S. 321-332.
- Ide, M. (1996) : *Lassen und läzen. Eine diachrone Typologie des kausativen Satzbaus*. Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Ide, M. (1998) : Die Formen des Infinitivsubjekts in der lassen-Konstruktion. Ihre kontextuellen Bedingungen. In: *Deutsche Sprache*, 26. Jahrgang, S.273-288.
- 井出万秀 (2013) : 「第4章 構文の変遷 (2) 使役構文とその周辺」、『講座ドイツ言語学 第2巻 ドイツ語の歴史論』 ひつじ書房、91-114頁 所収.
- Mann, Th. (1960) : *Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Band VI, Doktor Faustus*. Oldenburg: Fischer Verlag. (関泰祐・関楠生 (訳) : 『ファウスト博士』 (上) (中) (下)、岩波文庫、3巻共1985)
- McEnery T. and Hardie, A. (2012) : *Corpus Linguistics. Method, Theory and Practice*. Cambridge: Cambridge University Press. (石川慎一郎 (訳) : 『概説コーパス言語学—手法・理論・実践』 ひつじ書房、2014)
- Nedjalkov, V. P. (1976) : *Kausativkonstruktionen*. Tübingen: TBL Verlag Gunter Narr.
- Shibatani, M. (1976) : The Grammar of Causative Constructions: A Conspectus. In: *Syntax and Semantics*. Volume 6. pp.1-40.
- Speer, A. (1975) : *Spandauer Tagebücher*. Frankfurt am Main: Propyläen.

角田太作（2009）：『世界の言語と日本語 改訂版』 くろしお出版．

Wahrig, G. (1997) : *Wahrig Deutsches Wörterbuch*. 6. Aufl. Gütersloh: Bertelsmann Lexikon Verlag.

Wierzbicka, A. (1998) : The Semantics of English Causative Constructions in a Universal-Typological Perspective. In: Tomasello M. (ed.) : *The New Psychology of Language*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates. pp.113-153. (大堀他 (訳) : 「言語普遍的・類型論的観点から見た英語使役構文の意味論」、『認知・機能言語学—言語構造への10のアプローチ』 研究社、2011、173-226頁 所収)

Zifonun, G. u.a. (1997) : *Grammatik der deutschen Sprache*. Band 1, Berlin: Walter de Gruyter.

Der Gebrauch kausativer Konstruktionen mit *lassen* , bei denen Menschen das Subjekt darstellen

— anhand von Beispielen aus Thomas Manns „Doktor Faustus“ —

(1. Teil)

Hideo YUASA

Der Zweck dieses Aufsatzes, der aus zwei Teilen besteht, ist es, diejenigen deutschen kausativen Konstruktionen mit *lassen* (=kK) aus Thomas Manns „Doktor Faustus“ (=DF-Korpus), die Menschen zum Subjekt haben, sowohl nach dem syntaktischen Charakter des Infinitivs als auch nach dem semantischen Charakter des Objekts zum Kausativverb *lassen* zu klassifizieren und in der Folge die einzelnen kausativen Satztypen zu analysieren. Die Analyse fokussiert sich auf die Möglichkeiten des Sprechaktes des Verursachers gegenüber dem Verursachten, wie sie von A. Wierzbicka (1998) beschrieben wurden.

Tabelle 1 zeigt die Distribution der drei Verwendungen des Verbs *lassen* im DF-Korpus, nämlich Kausativ (wie bei [*NP im Akkusativ*+] *Infinitiv+lassen*), Passiv (wie bei *sich +Infinitiv+ lassen*) und *lassen* als Vollverb ohne Infinitiv:

	Kausativ	Passiv	<i>lassen</i> als Vollverb	Gesamt
Totale Häufigkeit	258	66	54	378
Prozent	68%	17%	14%	

Tabelle 1: Die Distribution der drei Verwendungen von *lassen*

Die kK mit „Mensch“ als Subjekt machen also ca. 73% von allen kausativen Sätzen aus, diejenigen mit unbelebtem Subjekt ca. 27% . Die totale Häufigkeit der kK mit belebtem Subjekt erscheint somit

im DF-Korpus als ziemlich hoch.

Als Bedeutungen der kK werden von V. P. Nedjalkov (1976) „Faktivität“ und „Permissivität“ angegeben. Diesen zwei Hauptbedeutungen der kK wird von vielen Grammatiken und Wörterbüchern beigeprlichtet. Der Begriff „causative situation“ von Shibatani (1976) bezeichnet keinen Sachverhalt, der als permissive Bedeutung der kK, also m. a. W. als „Lassen“ (Ide 2013), interpretiert wird, wie z.B. in *Ich lasse die Dusche weiterrieseln*, weil das „caused event“ vor dem Zeitpunkt des „causing events“ bereits stattgefunden hat.

Tabelle 2 zeigt die totale Häufigkeit der Fälle von kK im DF-Korpus, bei denen ein intransitives Verb als Infinitiv in Endstellung gesetzt ist:

belebtes O	dessen Auslassung	unbelebtes O	dessen Auslassung
28 (27%)	3 (3%)	74 (70%)	0 (0%)
31 (30%)		74 (70%)	
105 (100%)			

(O: Objekt des Kausativverbs *lassen*)

Tabelle 2: Die totale Häufigkeit der betreffenden einzelnen kK im Falle von intransitivem Verb als Infinitiv

Die totale Häufigkeit der kK, die sowohl ein intransitives Verb als Infinitiv, als auch ein unbelebtes Objekt von *lassen* aufweisen, ist am höchsten und das nicht nur in Tabelle 2, sondern betrifft alle Satztypen der kK im DF-Korpus. Wenn ein intransitives Verb als Infinitiv gebraucht wird, kommt die Auslassung des Objekts von *lassen* sehr selten vor. Der kausative Satztyp „Subjekt+lassen+ein unbelebtes Objekt+intransitives Verb als Infinitiv“ wird nach Ide (2013) als „Lassen“ semantisch interpretiert, wenn der Infinitiv eine durative Bedeutung hat, während er als „Zustandbringen“ interpretiert wird, wenn der Infinitiv eine momentane Bedeutung hat. In Wirklichkeit gibt es aber

manche Fälle, in denen die kK „Faktivität“ , mit Ides Worten „Zustandebringen“ bedeutet, auch wenn der Infinitiv einen dauernden Vorgang ausdrückt wie z.B.: *Er ließ es gelten*.

(Fortsetzung folgt)

Schlüsselwörter: kausative Konstruktionen mit *lassen*, Faktivität, Permissivität, Infinitiv, intransitives Verb, unbelebtes Objekt

キーワード：lassen使役構文、作為性、容認性、不定詞、自動詞、無生物目的語